



Title	ドーノワ夫人のおとぎ話における妖精にみる近代的母親像：母性の束縛
Author(s)	中島, 姫奈
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2023, 57, p. 103-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94915
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ドーノワ夫人のおとぎ話における妖精にみる 近代的母親像

——母性の束縛——

中 島 姫 奈

はじめに

ドーノワ夫人のおとぎ話には様々な妖精が登場する。妖精たちは皆女性で、ヒロインの生誕時に現れて死を宣告したり呪いをかける恐ろしい者もいれば、美貌や知恵を授けたり、助言をしたり試練を手助けしてくれる者もいる。妖精たちの持つ超自然的な力は強力な助けになる反面、敵対すれば命さえも奪いかねない脅威となる。

このようなヒロインの人生に大きく介入し影響力を持つ女の妖精には娘を直接庇護、教育し導き、時に脅威となる存在としての近代的な母親としての要素がうかがえる。

本論では、物語の中の妖精の母親的な性質と、実際に娘を持つ母親であったドーノワ夫人の母としての側面を、運命を定める妖精の起源、女性の庇護者、教育者としての妖精の役目、同時代の女子教育とそこでの母親の役割と母娘の関係の観点から考察する。

キーワード 妖精信仰、運命の女神、母性、女子教育

1 運命を定める妖精と妖精信仰

まず、ヒロインの誕生時に現れて運命を告げる妖精についてみていく。善良な妖精は美貌や才気、優雅さといった美德を授ける。複数人1組で現れる

こともあり、その場合は一人一人がそれぞれ異なる美德を授ける。

例えば『緑色の蛇』(*Serpentin Vert*)においては12人の妖精が訪れる。『森の雌鹿』(*La Biche au bois*)では花の名前を持つ6人の妖精たちがそれぞれ1人目は美德を、2人目は機知を、3人目は奇跡のような美しさを、4人目は幸運を、5人目は長期の健康を、6人目はヒロインであるデジレ姫が何をやってもうまくいくような幸運を授けている。

『サンザシ姫』(*La Princesse Printanière*)では5人組で1人目は完璧な美しさを、2人目は無限の機知を、3人目は歌を上手に歌える才能を、4人目は詩や散文の作品を作れる才能をそれぞれ授けている。

*Serpentin Vert*の中で子供の生誕時に妖精を招いて贈り物（ここでは美德や才能など）を授けてもらうことは当時の習慣であり、自然の力が損なったものを修復してくれると描写されている¹⁾。

このような習慣はフランスの地方では古くから存在している。例えばブルターニュでは子供が産まれると、たくさんの料理と3人分の食器を食卓に並べ、妖精に子供のもとへ訪れて、赤子に良い性質を授けてくれるように祈る習俗があった²⁾。ジャンヌ・ダルクの故郷ドンレミ村にも子供の洗礼時に妖精を招き、産婦の部屋で妖精たちに食事を供する習慣があったことがジャンヌをめぐる裁判の際に明らかになっている³⁾。

妖精たちは子供に良い性質を授けてくれるが、時に恐ろしい呪いをかけたり、死の運命を宣告する妖精も登場する。

*Serpentin Vert*においては双子のお姫様の誕生を祝う宴に招待されなかった邪悪な妖精マゴティースが腹いせにお姫様たちに「醜さにおいて完璧であれ」と呪いをかける。善良な妖精たちが守ったため双子の妹娘は難を逃れたが姉娘は呪いのとおり世にも醜い容貌になってしまう。そのためこの子はLaideronnette レドロネット（醜い女）と名付けられ、様々な苦難を味わうことになる。

*La Biche au bois*では子供に恵まれないことを嘆いていた王妃を、花の名前を持つ善良な妖精たちのもとへ案内したにもかかわらず、お姫様の生誕祝い

に招待されなかった泉に住むザリガニの姿をした妖精が怒って、お姫様が15歳になるまでに日の光を浴びることがあれば、死ぬかもしれないほど恐ろしいことが起きるだろうと吐き捨てて去っていく。

*La Princesse Printanière*ではお姫様の父親が子供の頃に邪悪な妖精カラボスに悪さをして怒りを買ったため、お姫様は20歳までにあらゆる不幸に見舞われるようにと呪われる。

いずれの物語においてもヒロインであるお姫様が死や不幸の呪いを与えられるのは本人の落ち度ではなく親の不手際のせいである。誕生を祝う宴に招待するのを忘れたり、お礼の品の用意が不足していたりしていたことで妖精を怒らせ、その結果ヒロインの身に死や不幸の運命が決定付けられる。

このような子供の誕生時に複数人で現れて美德や才能を授けたり死を宣告したり呪いをかけたりすることでその子の運命を定める妖精の起源は古代神話における運命の女神に遡る。まず挙げられるのはギリシャ神話におけるモイラである。彼女たちは3柱1体でそれぞれ人間の運命を示す糸を測り、割り当て、断ち切る役割を持っている。

ローマ神話におけるパルカも同様に3柱1組で妊娠と誕生、死を司る。『若きパルク』のようにパルカはローマ崩壊後も西欧文学において運命の女神として登場する。彼女たちの3人目は死を司る女神である。シチリアやバルカン半島にも3人組の運命の女神の伝承が多く確認できるが、3人目の女神が死の運命を宣告する事例が多い。

前述したブルターニュの習俗はバルカン半島によくみられる運命の女神への捧げものの風習と関連している。善良な妖精たちからの贈り物の後、最後に死を告げる妖精は3人目の死の女神であろう。⁴⁾ ブレードニヒによれば、妖精が登場する最古のフランスの文献において、妖精たちは通常は3人組で子供の誕生の際に現れ、出産を手助けし、彼女たちの判断に従って新生児に良い性質を授けた。しかし3人のうちの1人は授けるものの中に何らかの良くないものを混ぜる権限を持っていたと描写されていることが指摘されている。⁵⁾

フランスの13世紀及び14世紀の叙事詩や騎士道物語には3人組の妖精が頻繁に登場する。彼女たちは供された食事を食べ、未来を予言する。子供の誕生時に妖精を招いてもてなすのは慣習となっていた。ジャンヌ・ダルクは故郷の村に妖精の木と呼ばれる木があり、そこで祈りを捧げて異教の妖精を信仰していたと裁判の際に指摘されている。彼女は母親から運命を定める妖精について聞かされていた。キリスト教が広がってからもなお、フランスにおいて、特に地方では妖精信仰が根強く残り続けた。

ドーノワ夫人はノルマンディー地方で育ったが、彼女のおとぎ話はかの地に隣接する低地ブルターニュの昔話の影響を受けているとされる⁶⁾。ブルターニュには死にまつわる民話が数多く存在する。

先程運命の女神が運命を定める妖精の起源であると述べたが、そもそも妖精を意味する *fée* の語源はラテン語の *fata* である。これは運命の定めの人化であり、書き記されたもの、変更できないものを意味する⁷⁾。各地の伝承においても運命で定められた死からは逃れられない。

このように、妖精は人間の子供の誕生を祝福し良い性質や幸運を授けるが、同時に死や呪いを与える恐ろしい存在でもある。この相反する2つの性質は一体何なのか。世界各地の神話における母神にその特徴が伺える。母なる女神は命を産み出し育む一方で自らが産み出した命を摘み取る。生命の誕生と死の双方を管轄している。これは産み出した子を慈しむ反面押さえつけ束縛する母性の二面性を示している。妖精たちが母神の系譜にあると考えられる。

ブルターニュの習俗において妖精たちを母なる妖精たちと呼んでいることから妖精が母神崇拝のような信仰を集めていたと考えられる。

前述したパルカは出産の女神であり、その名は *par-ere* (生む)、*par-tus* (出産、分娩) と関連し⁸⁾、生命を生み出す母親としての要素を備えている。

中世フランスの *Perceforest* をみると、姫の生誕時に3人の女神が招待されるが、女神テミスの分だけナイフが用意されていなかった。侮辱されたと感じたテミスは姫が糸紡ぎの錘から引き出す最初の亜麻糸の棘が指に刺さって眠りにつき、棘が外に吸い出されるまでは決して目覚めることはないという

運命を下す。ここではテミスははっきりと運命の女神と呼ばれているが、⁹⁾彼女はギリシャ神話においてはモイラの母親とされる。テミス自身が子を持つ母親であり、母神としての要素を備えている。同時に彼女は掟を司る女神でもあるため、彼女の定めた運命がより厳格で変えられないものであることがうかがえる。

本項では、フランスにおける妖精信仰は運命の女神信仰に源流を持ち、生命の誕生と死に深く関わりを持つ運命の女神は生命を産み出し、死を与える母神の特徴がみられることを述べた。

次節では妖精と母性について、物語の中のヒロインと妖精の関係性、行動から探っていく。

2 庇護者、教育としての妖精

妖精はヒロインの前に現れて助言をしたり、課せられた試練を助ける。例えば *La Princesse Printanière* では邪悪な妖精カラボスにかけられた20歳までの不幸の呪いを解くことは出来ないが、20歳を過ぎた後は幸福に満ちた長寿を全う出来るように、まだ何も授けていなかった5人目の善良な妖精が祝福している。この妖精は物語の終盤でお姫様を狙ってやってきたカラボスと闘って打ち負かす。

Serpentin Vert ではマゴティースによって夫と引き離され様々な試練を与えられたレドロネットのもとに妖精 *Protectrice* がやってきて魔法の力で試練を助け、現状を嘆くレドロネットに対し彼女が夫である緑色の蛇との約束を破ったために招いたことであると諭し、自身の行動を反省させる。

Fortunée では悪辣な兄に苦しめられていたフェリシアは森で出会った妖精から撫子の鉢と良い香りの水を与えられ、これらの品々によって難を逃れる。実はこの妖精はフェリシアの叔母であった。貧しい農家の娘だと思われていたフェリシアが本当は姫であったという事実を打ち明け、彼女の命を狙って差し向けられた軍隊をキャベツに変え、彼女を虐げていた義兄に罰を与える。

そして、フェリシアの身分を回復し、自分の息子である優しく美しい王子と結婚させる。

La bonne petite souris では嫌がるお姫様に結婚を迫る粗暴で醜い王子とその父親である王様はネズミに変身した妖精によって噛み殺される。

妖精たちは、ヒロイン＝若い女性の庇護者、教育者としての役目を担っている。おとぎ話では妖精はしばしばフェアリーゴッドマザー（妖精の代母）と呼ばれるが、代母とはそもそもカトリックにおいて子供の洗礼式に立ち会って洗礼名を選択し、信仰生活の導き手となったり、実母が死亡した場合には後見人になるといった、第2の母と呼べるような役目を担う女性である。

しかしながら、ドーノワ夫人の物語ではヒロインの実母は既に亡くなっているか、生きていても直接娘を教育したり庇護したりすることはほとんどない。ヒロインに危害を加えたり、罪を犯した者に罰を与えるのも妖精である。物語の中で妖精は絶対的といえる決定権を持っている。

ザイプスはドーノワ夫人の物語は女性が自分の運命により大きな支配権を握ることが出来るように設定されていると述べているが、¹⁰⁾その女性とはヒロインというよりも妖精たちであるように思われる。もっとも、ヒロインにまるで何の決定権もないわけではない。例えば *La Belle aux Cheveux d'Or* では美しき金髪姫は隣国の王様からの求婚をまだ嫁ぐ気がないと断り、たくさんのおもてなし品も飾針一組を除いて全て送り返す。王様から自分を連れてくるように頼まれてやってきたアヴナンに次々と難題を与えては王様との結婚を回避しようとする。*La Princesse Rosette* ではお姫様は孔雀の美しさに夢中になり、兄王子たちに孔雀の王様が相手でなければ結婚しないと宣言し、兄たちに孔雀の王様を探しに行かせる。*L'Oranger et l'Abeille* では鬼に育てられたエイメ姫は、鬼の息子との結婚を拒否し、愛した人間の王子（実は彼女の従兄）を鬼たちから匿い、オレンジの木に姿を変えられた王子を手に入れようとした別の王女を蜜蜂に変身して刺す。

このように望まない結婚を拒否して男性側に様々な難題を与えたり、時に自らが戦う勇ましさを持ったヒロインもいるのだが、ここではあえて妖精の

持つ決定権に注目する。夫人はサロンでおとぎ話を語ったが、その目的はおとぎ話を貴族のサロンでの習俗の模範とし、自身の理想とする振る舞いや考えをサロンの貴族女性たちと共有することであったと考えられている。夫人の掲げた理想は幸福な愛情を得るための誠実さ、貞節であったとされるが、ヒロインにそれらを教え導くのは妖精である。

妖精たちは自らの基準に沿って生まれたばかりのヒロインに美德を授け、助言をし、罰する。妖精の定めた運命は覆らず、ヒロインは妖精に決められた運命を生き、妖精の助言に従って行動する。物語の中で妖精とヒロインの行動を通して自身の考えを伝え受け継ごうとしていたと考えられるのではない。実際、すべての物語の終わりに若い女性を対象にした短い教訓が添えられている。

ドーナワ夫人自身が自分の娘たちにおとぎ話を語って聞かせたかは定かではない。しかし彼女が執筆したおとぎ話、特に *Serpentin Vert* に影響を受けたとされるボーモン夫人およびヴィルヌーヴ夫人による『美女と野獣』の物語では、ヒロインは野獣の城で夜ごと見る夢に登場する妖精から助言をもらい行動する。妖精は王子に、彼女の持つ美德はその身分（ブルジョワ階級）以上に価値があると語り、王子はそれを納得して受け入れている。妖精が理想的な美德や振る舞いがどのようなものであるかを定義付け、その基準に沿った行動をするようにヒロインに助言を与えている。

この物語において、実はヒロインは別の妖精の娘であり、この妖精は実母に代わって彼女を見守っていたということが終盤で明かされる。早くに母親（育ての母）を亡くしている彼女にとってはほとんど母親同然の存在となっている。

ヒロインが野獣の城を訪れ、やがて結婚することは妖精によって初めから決められていた。妖精は自身が定めた通りの運命が進むようにヒロインを導いていたと考えられる。結果的にヒロインは幸福を得ることが出来たが、母親代わりの妖精が定めた運命と与えた助言の通りに行動しているため、妖精にコントロールされているようにも考えられる。ヒロインの出生に関しても、

いずれにせよこの物語の中で妖精は母親の要素が強い。母親が娘を守り、教え導く行為はともすれば娘を自分の基準に沿ってコントロールすることにも繋がると言える。これは前項で述べた母性の暗い側面、子供を束縛する行為である。

ナディース・ジャスマンはドーノワ夫人のおとぎ話における妖精の権能と語り手の関連性について言及している。ジャスマンによれば、語り手が物語を作り上げ、好きなように登場人物を動かしたり、その運命を決定付ける行為を物語の中で妖精が体現している。語り手が物語を紡ぐように妖精は登場人物の運命を紡ぐ¹¹⁾という。

おとぎ話作家ミュラ夫人は自身の著作の中でドーノワ夫人を「古代の妖精よりも学識があり、洗練された現代の妖精¹²⁾」と呼んだ。女性の運命を定め、理想とされる振る舞いや美德を伝える存在としての妖精は語り手であるドーノワ夫人と同一視されている。

次節では、娘を教育する者としての母親像、母と娘の関係性を女子教育、特に上流階級の女性の教育の観点から探っていく。

3 女子教育と母親

女性と教養をめぐる問題はドーノワ夫人のおとぎ話とそれが語られたサロンにおいても重要なテーマであった。17世紀の上流階級の娘は生まれてすぐに修道院に預けられ結婚適齢期になるまで教育を受けるのが通常であった。それに対して、家庭での母親による教育を提唱し始めたのがフェヌロンとセヴィニエ夫人である。

まず、セヴィニエ夫人は1671年にグリニャン伯爵と結婚した娘フランソワーズが夫と共にプロヴァンス地方に旅立ってから以後23年に渡る文通を行った。娘への書簡には寓話の一節、演劇の登場人物やその台詞を引用して娘の行動や生活態度を諫め励ましている。母娘が共に古典文学作品の教養を身に付けていることがうかがえる。セヴィニエ夫人は幼くして両親を亡くし

祖母や伯母のもとで育った。伯母とその友人の婦人たちは教養があり、彼女らの集まりに参加して教えを受けた。少女時代のセヴィニエ夫人は読書好きで小説や歴史書を好んで読んだ。彼女自身は修道院へは行かなかったのだが、娘フランソワーズをナントの修道院に預けた。彼女は晩年になってそのことを「蛮行」barbarieと呼ぶほど後悔している。¹³⁾ 結局フランソワーズは娘との別離を寂しく思った母によって12歳で連れ戻されている。セヴィニエ夫人は娘を手元で、自身が受けたものと似た「読書と会話をベースにした¹⁴⁾」イタリア語やスペイン語の小説や詩を読む教育を受けさせた。

さらに孫娘の教育に関しても、修道院に入れることを反対していた。フランソワーズは母の言葉に背いて自分の娘を6歳から修道院に預けたが、14歳で手元に戻している。セヴィニエ夫人は、今度は家庭で母親が教育するように説得し、フランソワーズはそれを受け入れた。彼女は体調が悪い時に娘に口述筆記をしてもらうことがしばしばあったが、セヴィニエ夫人はその作業がフランス語を学ぶと同時に孫娘が自身の母親の思考を知り、母と娘の密接な関係を受け継ぐことになると説いた。¹⁵⁾ 彼女は手紙を通して孫娘の教育に関する娘への助言という形で自分の思考を伝え実践させようとした。自分と娘のものと同じような親子関係を娘と孫娘が築くことを望んでいたように考えられる。書簡から当時としては極めて異質であり、近代的な母娘関係に似た母から娘への強い愛情が伺える。実際に彼女は自分ではかのかのどの母親にもまして娘を愛しているとはっきり述べている。¹⁶⁾

しかし孫娘の教育に口を出し、娘が母親の思考を受け継ぎ母親が受けたものと同じような教育を受けることを熱心に勧めるセヴィニエ夫人の様子は自身の思考で娘、ひいては孫娘を染め上げようとしているように見られる。吉田郁子は社交的で快活なセヴィニエ夫人と内向的なフランソワーズの性格の違いから母の愛情の強さに娘が息苦しさを抱いていたのではないかと指摘する。¹⁷⁾

セヴィニエ夫人は娘が大貴族と縁組し宮廷で引き立ててもらうことを目的としていたという。それは夫人自身が叶えなかった夢であり、娘を自分の分

身にして自分は成し遂げられなかったことを成してほしいという熱望であった。¹⁸⁾

もっとも夫人自身が教育を受けて豊かな教養を備えており、そんな母から教育を受けたおかげでフランソワーズは母と同じく教養と知性ある女性へと成長したのだが、セヴィニエ夫人の近代的な母親らしい愛情と母娘関係は娘への束縛とも見てとれる。

修道院教育と家庭での母親による教育の是非についてはフェヌロンが『女子教育論』の中で言及している。奇しくもセヴィニエ夫人の孫娘が修道院から帰ってきた年は『女子教育論』が出版された翌年である。同書の最終章の後に付された *Avis à une dame de qualité sur l'éducation de sa fille* 「娘への教育について、身分ある婦人への忠告」を見ていく。

フェヌロンは、母親たちはしばしば娘を教育するのに必要な知識に欠けているから、娘たちにとって最も安全な方策は修道院に委ねることであると述べている。しかし、文中において語りかける相手の夫人は例外的に彼女の娘の教育者として修道院よりも適任であるとしている。同時に修道院における教育の問題点も指摘している。

修道院が規則正しさの中にある場合、身分ある若い娘がそこで世間に対して深い無知のうちに成長する。世間に対して無知であるがゆえに世間から切り離され、徳がまだ深く根付いていない少女は、すぐに、最も驚くべきことが自分から隠されていると信じたくなる。修道院を出た少女は、深い洞窟の暗闇の中で生まれ、突然外に連れ出された人のようだ。¹⁹⁾

世俗から隔離された修道院で育った娘は世間に関して無知で誘惑に弱い。そこで、フェヌロンは母親による教育を提唱する。

少女にとっては、敬虔で思慮深い母親、見るべきものだけを見せ、折に触れてその欠点を見せ、必要な時に控えめに振舞うという実例を見せ

る、そういう母親のもとで徐々に世間に慣れていくほうがずっと良い。
[...] 立派な母親が教育に参加する自由を持っているとき、良い母親の教育はもっと頼りになる。²⁰⁾

娘を教育するのに必要な知識を母親が持っているのであれば、修道院ではなく家庭で立派な母親に育てられた方が良いということである。

フェヌロンは修道院での教育を高く評価しながら、母親が知識を備えている場合に限って家庭での母親による教育により期待をかけている。しかし母親が片時も娘から目を離さないではいられない状況も指摘している。

あなたが娘から離れざるを得なくなったときに、あなたに代わって娘について責任を負う確かな人物を持たれるべきだ。その人物は穏やかな権威の行使の仕方を知り、他の女性たちの職務を守らせ、娘の憎しみを買うことなく必要に応じて正し、その後注意を払うべきことがあなたに報告できるだけの分別と美德を備えていなければならない。²¹⁾

母親に代わって娘を教育し、正し、導くことのできる能力と美德を備えた女性とは正におとぎ話における妖精がその役割を果たしている。

フェヌロンの重要視する女性の能力や美德とは教養や才気ではなく糸紡ぎや裁縫といった家政である。彼は娘が才気に夢中になり家庭を疎かにすることについて警告しているから、セヴィニエ夫人の教育内容やドーノワ夫人の才気とは異なる。

しかし母親が娘を教育するなら娘が悪い誘惑に流されないように母の目の届く所に置いておくことを推奨しているという点ではセヴィニエ夫人とフランソワーズの母娘関係と似ていると考えられる。セヴィニエ夫人はフランソワーズの夫が結婚当初は職務上任地へは行かずパリに住むことに喜び、娘夫婦と自身の邸宅で共に暮らすことを目的としていたという。教育についても母の手元で母の思考を受け継がせることを目的としていた。片時も娘から目

を離さないで教育し、出来ない時であっても代わりに娘を諭し、過ちを母に報告出来る女性をつけていればずっと娘の行動に目を光らせ、教え導くことが出来る。

いずれにせよフェヌロンの提唱する家庭での母親による娘の教育を実践するとすると母娘の距離が縮まり、必然的に束縛しやすくなるであろう。娘の行動、思考は母の監視下に置かれ、母の基準に沿って矯正される。セヴィニエ夫人は自身が良いとする価値観に沿って娘に教育を与え、結婚相手を決めた。妖精がヒロインに美德や才能を与え、助言をし、王子との結婚を決める、あるいは促すように。その根底にあるのは妖精あるいは母親の規範に基づいた知識や美德を備え、その規範通りに行動すれば幸せに暮らせるという考えである。母親による娘の教育は母性の二面性をよりはっきりと浮き上がらせているように考えられる。

結論

ドーノワ夫人のおとぎ話において、妖精はヒロインの教育者であり、庇護者である。

ヒロインは時に過ちを犯すが、妖精に諭されて反省する。不運に苛まれることがあっても妖精の助言に従って試練を乗り越え、誠実な男性との幸福な愛を得る。彼女が物語の中で設定した基準は彼女が自身の体験や思考から得た貴族としての理想の振る舞いである。それは貞節や誠実さが重要視された。

妖精はヒロインの運命を定め行動を諫め、彼女たちの基準に従って祝福も罰も与える。善良な妖精はヒロインを守護し、愛情を抱いている。

ドーノワ夫人は自分の定めた理想や幸福を妖精に託したおとぎ話の語りを通して伝えようとした。運命の女神、妖精による若い女性の守護と教育、母親による娘の教育を通して、慈しみ育むと同時に吞み込み束縛する母性と娘に自身の思考や価値観を引き継がせようとする母親像が明らかになった。

ドーノワ夫人は男性による支配を拒み、物語の中で家父長的な神ではなく

女の妖精に絶対的な決定権を持たせたが、そこには母神的な妖精による決定、母性による支配が存在しているようにうかがえる。

[注]

- 1) Madame d'Aulnoy, *Contes des Fées suivis des Contes nouveaux ou Les Fees a la Mode*, édition critique établie par Nadine Jasmin, volume 1, Paris, Honoré Champion, 2002, p. 575.
- 2) ブレードニヒ、『運命の女神 その説話と民間信仰』、竹原威厳(訳)、白水社、1989年、p. 278。
- 3) ブレードニヒ、前掲、p. 279。
- 4) ブレードニヒ、前掲、p. 276。
- 5) ブレードニヒ、前掲、p. 277。
- 6) 新倉朗子、「オーノワ夫人の妖精物語集について」、『東京家政大学研究紀要 人文科学・自然科学』第28号、1988年、p. 1-7、p. 6。
- 7) ブレードニヒ、前掲、p. 273。
- 8) ブレードニヒ、前掲、p. 272。
- 9) 片木智年、『ペロー童話のヒロインたち』、せりか書房、1996年、p. 91。
- 10) ザイプス、『おとぎ話が神話になるとき』、吉田順子・阿部美春(訳)、紀伊國屋書店、1999年、p. 51。
- 11) Nadine Jasmin, *Naissance du conte féminin., Mots et merveilles : les contes de fées de Madame d'Aulnoy (1690-1698)*, Paris, Honoré Champion, 2002, p. 389.
- 12) *Ibid*, p. 378.
- 13) 森本彩「セヴィニエ夫人の手紙にみる17世紀の女子教育 グリニャン夫人との母娘関係を巡って」、『エイコス 十七世紀フランス演劇研究』、18号、2016年、p. 67。
- 14) 森本彩、前掲、p. 67。
- 15) 森本彩、前掲、p. 70。
- 16) Madame de Sévigné, *Madame de Sévigné : Correspondance, tome II Juillet 1675 Septe mbre 1680*, texte établi, présenté et annoté par Roger Duchêne, Paris, Gallimard, 1974, p. 1600.
翻訳にあたり、吉田郁子(訳注)、『セヴィニエ夫人の手紙』、東京大学書林、1995年、p. 87を参考にした。
- 17) 吉田郁子、前掲、p. 11。
- 18) 森本彩、前掲、p. 65。

- 19) Fénelon, *Oeuvres complètes de Fénelon, ...Éducation des filles, Discours, panégyrique s, sermons, etc.*, Paris, Gauthier frères, 1830, p. 101.
- 20) *Ibid.* p. 102.
- 21) *Ibid.* p. 103.

[参考文献]

Anne Defrance, *Les contes de fées et les nouvelles de Madame d'Aulnoy, (1690-1698) : L'imaginaire féminin à rebours de la tradition*, Genève, Droz, 1998.

Fénelon, *Oeuvres complètes de Fénelon, ...Éducation des filles, Discours, panégyriques, sermons, etc.*, Paris, Gauthier frères, 1830.

Jean Mainil, *Madame d'Aulnoy et le rire des fées, Essai sur la subversion féerique et le merveilleux comique sous l'Ancien Régime*, Paris, Kimé, 2001.

Madame de Sévigné, *Madame de Sévigné : Correspondance, tome II Juillet 1675-Septembre 1680*, texte établi, présenté et annoté par Roger Duchêne, Paris, Gallimard, 1974.

Nadine Jasmin, *Naissance du conte féminin., Mots et merveilles : les contes de fées de Madame d'Aulnoy(1690-1698)*, Paris, Honoré Champion, 2002.

Valentina Alzati, «Les contes de Mme d'Aulnoy et leur fortune en Europe (France; Italie;Grande-Bretagne; Allemagne)1752-1935», Saint-Ouentin en Yvelines, le 15, 2018.

片木智年、「バジール『灰だらけのメス猫』と 17 世紀フランスの妖精をめぐる」『藝文研究』第 103 号、2012 年、p. 149-165。

片木智年、『ペロウ童話のヒロインたち』、せりか書房、1996 年。

ザイプス(著)、吉田順子、阿部美春(訳)、『おとぎ話が神話になるとき』、紀伊國屋書店、1999 年。

シュネデール(著)、渡辺明正、篠田知和基(監訳)、『フランス幻想文学史』、国書刊行会、1987 年。

田中理沙、「おとぎ話による女子教育の観点からみたルブラン・ド・ボーモン夫人『美女と野獣』」、『学術(情)博』第 250 号、2018 年。

ブレードニヒ、『運命の女神 その説話と民間信仰』、竹原威蔵(訳)、白水社、1989 年。

フロリス・ドラットル、『フェアリーたちはいかに生まれ愛されたか』、井村君江(訳)、アトリエサード、2022 年。

マリーナ・ウォーナー『野獣から美女へ おとぎ話と語り手の文化史』、安達まみ(訳)、河出書房新社、2004 年。

森本彩「セヴィニエ夫人の手紙にみる 17 世紀の女子教育 グリニャン夫人との母娘関係を巡って」、『エイコス 十七世紀フランス演劇研究』、18 号、2016 年、

pp. 67-80。

リチャード・サッグ、『妖精伝説 本当は恐ろしいフェアリーの世界』、甲斐理恵子(訳)、原書房、2022 年。

吉田郁子(訳注)、『セヴィニエ夫人の手紙』、東京大学書林、1995 年。

(大学院博士後期課程学生)

RÉSUMÉ

Figure maternelle moderne vue dans les contes des fées de Madame d'Aulnoy : La domination maternelle

Hina NAKASHIMA

Dans les contes de Mme d'Aulnoy, les fées jouent le rôle des mères des héroïnes, elles les éduquent et les protègent la plupart du temps. D'abord, ce sont elles qui décident du sort des héroïnes. Dans certains de ses contes, les fées sont invitées à la scène de naissance des héroïnes. Certaines des fées offrent des dons aux héroïnes. Mais une des fées est en colère à cause de ce que les parents d'une des héroïnes ont fait. Elle lance une malédiction sur l'héroïne.

Les fées qui décident les destins des héroïnes, peuvent être identifiées aux trois déesses sœurs du destin, qui sont les sœurs Moira dans la mythologie grecque, ou les sœurs Parca dans la mythologie romaine. Elles ont un lien profond avec la naissance et la mort. Ce sont les déesses mères qui dominent la naissance et la mort. Donc les fées ont le même caractère que celui des déesses mères.

Ensuite, les fées aident les héroïnes à surmonter les épreuves, elles les protègent contre les malédictions, et elles les éduquent. Je trouve que les fées jouent le rôle des mères des héroïnes.

Mme de Sévigné, écrivaine du XVII^e siècle, a éduqué sa fille elle-même. Elle a dit qu'il était très important que les filles fussent éduquées par leur mère, parce que les mères pouvaient transmettre à leurs filles l'éducation et les vertus qu'elles avaient reçues. Mme de Sévigné voulait que sa fille et sa petite-fille héritent de sa pensée et de ses valeurs.

Fenelon a dit qu'il était mieux que les filles fussent éduquées par leur mère cultivée plutôt que de passer du temps dans un monastère. Parce qu'il considérait que les filles qui ont été élevées dans des monastères connaissaient peu le monde et se laissaient facilement tenter.

Mme d'Aulnoy était une mère de cinq filles. Elle a écrit ses contes pour raconter ce qu'elle pensait aux femmes dans les salons. Je pense que Mme d'Aulnoy espérait que ses filles accepteraient son opinion et ses idées. Les mères aiment les enfants, mais elles essayent souvent d'imposer leurs idées aux enfants. Les déesses mères donnent naissance aux vies mais elles tuent les vies auxquelles elles donnent naissance.

Cette domination maternelle peut parfois être étouffante.